

## フリーカードの実践と定期試験の結果について

金 井 健

長野救命医療専門学校 救急救命士学科

## About the practice of free cards and the results of regular exams

Takeru Kanai

Nagano paramedical college

**要旨**：本校救急救命士学科 1 年生の定期試験は今年で 15 回目となる。過去 14 回の定期試験結果をみると全員合格は一度も達成していない。この成績不振を改善すべく、今回は学生が面白いと感じる授業の仕方を探究するため、フリーカードを活用して学生の意見を聴取した。それらの意見に基づいて、「学生の声」を反映すべく従来の授業方法に改善を加えてみた。シラバスとは異なる部分もあったが、実施可能な部分から積極的に試行を試みた。結果として定期試験は全員が合格し一応の成果を収めることができた。フリーカードを活用した授業の改善には時間を要したが、長期的な計画性をもって創意工夫を継続することは、今後の授業展開に効果をもたらす大きな因子となるであろう。「学生の声」は、面白いと感じる授業の仕方を探究する重要な一つの足掛かりになったと考える。

## 1 はじめに

「歴史は繰り返す」。クルチュウス＝ルーフスの言葉である。今から 100 年以上も前に大流行したインフルエンザがあった。全世界ではおよそ数千万人が亡くなったともいわれるスペイン風邪は、人類史における最大級のパンデミックといわれている。今年、未知の新型コロナウイルスが猛威を振るい、世界的な感染拡大により死者が 100 万人を超えた。そして、現在も増え続けている。日本においても例外ではない。経済の低迷はリーマンショックを上回り、国民生活や学校教育など多方面に甚大な影を落としている。そのような状況下において、本年 4 月には令和 2 年度新学期がスタートした。以前より学生の基礎学力低下については、いろいろな分野から問題視されていると新聞などは論説している。最近では授業時

間や教科書の内容を増やすなど、学力向上を目指すための取り組みはすでに始まっている。新聞によると、国際教育到達度評価学会は、世界の小 4 と中 2 に当たる学生を対象とした 2019 年国際数学・理科教育動向調査の結果を公表した。それによると、日本の理数学力はトップ水準を維持し、学習意欲については「算数・数学、理科は楽しい」と答えた学生が増加している。救急救命士国家試験 100%合格を目指す本校救急救命士学科においても、学力の底上げは喫緊の要事となっている。それぞれが、それぞれに多種多様な手法を用いて学力の向上を目指してはいるが結果として結実してはいない現状がある。その原因は指導者側にあるのか、学生側にあるのか。物事の良し悪しには必ず原因がある。今回は、その原因を検索するための手段として、救急救命士学科の 1 年生に対してフリーカードを活用した授業の仕方を実践した。フリーカードを活

用した授業展開の効果と授業態度も併せて、2020年度定期試験結果について報告する。

## 2 フリーカードを活用した授業の仕方について

今回は救急救命士学科第15期生の11名を対象として、45コマの授業回数のうちから主に座学の30コマについてフリーカードを用いた授業に対する学生の意見を聴取した。

フリーカードの記入は無記名方式とし、授業の指導方法に対する学生の個人的な考え方を問うこととした。第1回から第10回までを前期、第11回から第20回までを中期、第21回から30回までを後期に分類し、それぞれのフリーカードに記載された事項の中で、注意しなければならない項目、良かったと思われる項目、改善されたと感じた項目について評価を行った。特に重要と思われる意見に対しては、可及的速やかな説明を行った。フリーカードの主な記載内容は下記のとおりである。

### (1) 前期の重要項目 (抜粋)

- ①テキストは読ませない方がよい。
- ②授業の進み方が早い。
- ③何処の説明か分からない。

前期の抜粋項目中で最も注意しなければならないことは「テキストは読ませない方がよい。」である。非常に残念な考え方であると感じた。この意見から推測できることは、予習をしないまま授業に臨んでいるものと考えられる。いわゆる、打っ付け本番である。文字や言葉は人間だけが持つ情報伝達の手段である。これからの学校生活3年間において、或いは社会人として生きていく中で、読み書きは絶対に必要である。一つひとつ字を読むことは頭脳を使っていることである。活字を読まないことは特に危険なファクターと考える。音読にせよ黙読にせよ活字を読むという行為に大きな差異はない。声に出して、或いは人の前で読むか読まないかの違いだけである。社会生活はすべてにおいて読むことから「理解」が始まる。読んで「理解」することは生きるための基本であり勉強するためには必要不可欠だ。音読させてみると、ルビのある漢字

は良いが、一般的な漢字が読めないことには、スムーズな音読は期待できない。音読をさせると、読み方が遅く何度か漢字で躓いてしまう学生もいるため、その分だけ授業の進行が早くなってしまふ。予習することによって、ある程度の内容を理解する。繰り返し読むことでスムーズな音読になる。疑問とする部分は授業中の質問などによって解決し、知識を更に豊かなものとして蓄えるのが良いのではないか。予習をしていないため何処に何が書いてあるか分からない。大まかなアウトラインも分からない。復習をしていないから関連事項を問いかけても答えが返ってこない。従って、説明もよく分からないのではないかと考えた。もしくは、本当の原因は筆者自身の授業の仕方が悪いことも大いに考えられる。指導者も学生もこのままの状態では授業を積み重ねるとしたら、結果的に知識や技術の習得が身に付かない、面白くない授業になってしまうのではないか。そこで、これらの項目に対する対処法として、学生として極当たり前の心構えを指導した。読めない漢字にはルビを付けること(予習)。何度も読み返すこと(予習)。疑問点や質問箇所は付箋をつけること(予習)。今までの授業の再確認(復習)など、予習・復習という基本的な学習習慣を身に付けることを徹底的に指導した。いわゆる極当たり前の話である。

今まではどんな勉強方法をしていたのかを学生に問いかけた。すると、「今まで本気に勉強をしたことはない。」という答えが返ってくる。テキストを読まなければテキストの内容を把握することはできないし、シラバスに沿った授業をするためには、ある程度のスピードも必要となる。資格試験や競争試験に向けた目的のある勉強は如何にあるべきか。Diploma policyは何か、国家試験合格にflukeはあり得ない。などについての質問や説明を逐次行った。予習はこれから学ぶことの下見であり、確認テストは今まで勉強した知識や技術の確認である。これらの過程を確実に行ってから定期試験に臨んで欲しいことを強く訴えた。併せて予習・復習の重要さをその都度指導した。予習、復習を日常的に行っているか。という質問をしたところ、初期の段階で挙手をした学生は殆どいなかった。それは、

学習習慣が身につけていなかったことが原因ではないかと考える。

(2) 中期の重要項目 (抜粋)

- ①思っていることを伝えられた。
- ②雑談と体験談の違い。
- ③資器材を実際に触れられた。

中期の抜粋項目中で良かったことは「思っていることを伝えられた。」であろう。

座学では、フリーカードに記載された学生の本音に基づき、従来から行っていた対面による授業の仕方ではあるが、面白い言葉やジェスチャーなど、少し行動を変えて実施した。「ピエロ」的かも知れない。出来るだけ学生との距離を近づけたキャッチボール的な質疑応答などを多く試みた。学生を変えるのではなく、「学生の声」に対して、指導者自身が授業の仕方を変えてみた。すると意見の内容にも少しずつ変化がみられた。勿論学生との距離はソーシャル・ディスタンスである。通常とは違う言葉の具体的な例とし、一般的に分かる簡単な例を挙げて説明するなど、日常的な行動の中から理解をさせるような授業を試みた。いわゆる例えば何々である。また、居眠りの学生に対しては、教壇を降りて本人に近づき、本校を志願した理由や、趣味などについての話を聞いてみる。そこで筆者自身の居眠りによる失敗などを話していると、学生もしっかり視線を合わせて話を始める。このような、ちょっとした行為が指導者と学生間におけるコミュニケーション作りの手段として、その一方法になったと考える。しかし、学生個人との会話は確かに授業が一次的に中断することになる。従って学生の中にはこのような会話を「雑談」と捉える学生もいるため、フリーカードにも「雑談」についての記載があった。「雑談」と「体験談」はどのような違いがあるか。「雑談」とは、「とりとめのない会話」となっている。従って話の仕方も慎重な対応が必要である。

実習授業については、実技を先行させてから座学を行った。座学では、テキストのイラストや写真、或いは、すでに救急資器材に直接触れていることによって、知識や救急資器材の構造を理解しやすくなり、おのず

と理解度や技術力が向上したものと考える。結果的に興味をもって授業に参加すれば、面白く、楽しく感じたのではないかと考える。従って楽しい時間は短く感じるのも道理である。学生の意見を少しずつでも取り入れた授業が効果的であった可能性も考えられる。

授業と言えば、教壇に先生。板書するチョークの音。そして先生の説明や質疑応答。学生は黒板に向ってひたすらにメモを取る。太陽に向かって一斉に黄色い頭状花を向ける向日葵群のような風景が記憶している授業風景である。しかし、現在の授業のあり方を考える時、学生の学習意欲が低下しているとするならば、学生側の変化を待つのではなく、指導者側から行動を起こさなければ学生は勉強に目を向けてくれないのではないかと考えた。今まで通りの授業形態を以って指導を進めても、学生の受講態度が負に変化しているのであれば、指導者側もそれに対して変化せざるを得ないのではないかと考えた。面白いと感じる授業であれば、学習意欲も自然に向上するのではないかと考えた。そこで、自分自身を学生側の立場に立って話をする事を実践した。

(3) 後期の重要項目 (抜粋)

- ①テキストは読ませた方が良い。
- ②確認テストの回数を増やして欲しい。
- ③面白い。

後期で見られた非常に大きな変化は、「テキストは読ませた方が良い。」や「面白い。」である。初期においては不評を買った項目が後期では逆転となった。また、確認テストの回数について記載があった。このことは、学生側の授業に取り組むべき姿勢の変化と捉えるべきであろうか。

授業も終盤になると、指導者と学生、また、学生同士のコミュニケーションもある程度はスムーズになったと感じられる。しかし、全体的にはやや心配もある。特に注意したいのが積極性の問題である。座学においては質問をしない、居眠りなどがある。実習においては、消極的な学生や雑談する学生も散見された。

昨年の授業では、放課後の居残り勉強や質問、実習訓練の依頼をする学生は殆ど記憶していない。よって想定実習では知識と技術不足から基本的な行動が伴

わずに躓いている学生が多く見受けられる。定期試験でも不合格者は3割以上で平均点も低い結果となった。しかし、今回は、朝、昼休み、放課後など、授業時間以外においても、体力錬成や実習訓練の指導依頼が頻回にあった。また、それらの学生は目標をしっかりと見定めて行動しているように感じる。

学生同士がお互いに切磋琢磨し、意見交換や問題を解決しようとする姿勢がみられたことは、学習意欲の表れと評価したい。知識や技術の習得に励む学生の姿は誠に爽快である。自主トレーニングをした学生の成績は知識、技術とも優秀であった。

後期では、今までの知識や技術の反復訓練が日課となるよう、信念をもって登校すること。授業においては、知識と技術は「表裏一体」であることなどを煩く指導した。シラバスの順番を敢えて変更し、実技を先行させた結果、フリーカードには、面白かった、楽しかった、確認テストの回数を増やして欲しい、などの記載は指導者としては嬉しい限りである。このことは学習習慣が多少なりとも身に付き始めた証と捉えたい。ただ、全員の資質が向上したかと問われれば、それ相応の疑問は残るだろう。最も改善されたことは、「テキストは読ませた方が良い。」という当たり前の言葉だった。

### 3 定期試験の結果と平均点の評価について

救急救命士学科1年生に対して実施した過去5年間の定期試験結果を表1に示す。4年間における定期試験の合格者は約64%前後で推移している。今回実施した定期試験では、点数の格差はあるものの、全員合格することが出来た。平均点は83点で過去5年間の比較では最もハイスコアとなった。しかし、人数的な状況を加味すると、数字だけでは一概に良し悪しを評価することは早計な部分もあると考えられるが、全員合格という結果は評価すべき効果ではないかと考える。表1から合格者数と平均点は相関していることが分かる。夢を叶えるには「遣る気」が最も重要である。

表1 定期試験の結果と平均点

期/受験者	合格者	合格率	平均点
11期/27	15	56%	63
12期/30	17	57%	64
13期/21	16	76%	75
14期/23	15	65%	57
15期/10	10	100%	83

### 4 定期試験の結果と授業態度について

座学における積極性、実習における積極性とは何かを考える時、両者を別々に評価することはできないと考える。

何のための勉強なのか。何のために救急救命士の勉強をするのか。今、しっかりとした答えを持っていないければ真剣に授業に取り組むことはできない。受動的な授業態度は、救急救命士に対する意欲の欠如とも言えるのではないだろうか。

座学においては、黒板に目を向ける。指導者の話をよく聞く。質問が多く、課題もしっかりと提出できる。などが一般的な評価である。従って居眠りや雑談などをしない真面目な学生を授業態度が良いとしている。

実習においては、指導者の指示を良く守る。授業の準備や後片づけ、清掃を確実にやっている。各種資器材を大切に使う。実習では率先躬行して練習を行う学生ではないかと考えている。

一般的に座学と実習は平衡の関係にある。今回の定期試験から判断できることは、座学の点数が良い学生は実習も良くできている学生であった。目標や意見を同じくする学生同士が、授業時間外に予習、復習、自主トレーニングを実践していた結果であると考えられる。従って、授業を大切に使う学生は自ずと授業態度も良好であった。

### 5 フリーカードに対する学生アンケートについて

今回は10名の対象者に対して9名の学生から回答を得た。フリーカードについてアンケートの内容を学生の掲載許可を得て紹介する。(原文)

1. 自分が「こうして欲しい！」と思ったことが直接言にくいことも書けたし、それを反映してくださっ



- たので特に不満はなかった。授業の中で（履修している中で）一番楽しかった。
2. 実際に直して欲しい所が伝わって改善されていて、より自分たちに合った授業になっていたと思います。
  3. 授業の振り返りができたり、教官に質問したり、聴きたいことを直接よりも言いやすかったです。たまに書くことがなくて困ることもありましたが、より良い授業になっていたと思います。できれば2回に1回にして頂きたいのですが。
  4. 直接授業をこうして欲しいなど言うことが出来ないと思うので、紙に書いて伝えるという時間を設けてもらうことで、より一層授業が分かりやすくなったと私は思いました。
  5. 自分たちの書いた意見を次の授業の時に取り入れてくれるので、とても良かったです。また、直接聞きづらい事なども、カードに書けば次の授業の時に言ってくれるので、そこも良いと思いました。
  6. 分からない所を記入すれば、そこに対しての答えが次の時間に説明してもらい、分かるようになったり、こうしたいという事を記入すると、次の授業からそのやり方でやってくれたり、学習しやすい環境にさせてくれるものでした。
  7. 授業に対する不満を書いた場合、次の授業では、その対策を講じて下さるので、教官の授業や、私たちにに対する態度が分かったのが嬉しかったです。
  8. あまり自分からこうして欲しい、ここが分からないなどと聞くことがなかったのでフリーカードで色々聞いたので良かったと思う。
  9. 自分が分からない所などを聞けるのでいいと思います。

## 6 授業の進め方に対する学生アンケートについて

今回は10名の対象者に対して9名の学生から回答を得た。授業の進め方についてアンケートの内容を学生の掲載許可を得て紹介する。(原文)

1. 分かりやすかった。座学の時に、時々何処をやっているか分からなくなったけど現場の話はとても興

味深かった。

2. たまに出るギャグが面白かった。座学では、脱線したところもあったけれど、経験を交えながら教えてくれたので、自分は良いと思った。ただ、時々、話が飛ぶことがあるので直して欲しいです。実技ではマニュアル等もくれて、精度は別としてやりやすかった。
3. 現場での経験等を話してくださって、イメージがしやすかったです。また、何故そうなるのか。というところを何度も言っていたので、家に帰って勉強する時に理解しやすかったです。先に実習を行った分野では、より、イメージがし易く、確認テストでも良くできました。あと、授業前に、毎回110回のテンポでカウントを1人ずつやっているの、自然と体に、リズムが入りやすいです。
4. 一時期、教官の体験談を聞けなくなった時期がありました。体験談を聞くことによってイメージが膨らみます。面白いので、これからも体験談等は話して頂きたいです。進む早さも私は、ゆっくりだと思っているので、いいと思います。
5. シミュレーションを先にやる事で教科書に書いてある機材などがイメージでき授業の内容をより深く理解する事が出来ました。授業スピードも速くなく、授業内容を理解する事が出来ました。
6. 最初は教官が「こうやってやる」というようにやってくれて、その後に自分たちがやる。そして、沢山触って手で覚える。という形がとても良かったです。出来なくても教官がやってくれて、それで理解する事もありました。最初に機械を触ってみてから教科書をやるという進み方がとても分かりやすく学習することが出来ました。
7. 口頭で説明してから実技に入るのではなく、実技をやってから説明なので、聞いている内容を想像しやすかったです。また、「百聞は一見にしかず」なので、やはり聞くよりも、実際にやる方が覚えられた。抜き打ちテストをもっとやって欲しいです。とっさに来るようにならなければ。
8. 最初の頃の座学のフリーカードに、「雑談が多い」と

の意見を出してから雑談は減ったと思うけれど、別にあっても良かったと思う。(個人的に雑談と一緒に覚えている所が多いので。) 全く違う話にならなければ良いと思う。授業は楽しかったので良かったです。

9. 教官の体験談も聞けるので良かったです。テストで一通りやってから実際にやるよりも、実際に触れてからの方が良かったです。

## 7 考察

フリーカードの意見に基づいた授業を実践したことによる成果については次のことが考えられる。

1. 無記名方式としたことで学生の本音を聴取できた。
2. 学生の声を基本とした授業の仕方について工夫をすることが出来た。
3. 指導者と学生間におけるコミュニケーションの構築をすることができた。
4. 「学生の声」を活字で残すことにより、今後の重要な参考資料となった。

今回の定期試験では、対象者も少なく、情報源としての確実性には乏しい内容かも知れないが、救急救命士学科の観察・救急処置授業における定期試験では、得点の格差はあるものの初めて全員が合格となった。結果として前期の学習成果は良いものになったと考える。今後は記載された内容を更に精査し、きめの細かいテンプレートとして活用できるよう改善していきたい。このような結果から、フリーカードを活用したことは、新しい授業展開にとって有意義であり、指導者と学生間の気持ちを伝える懸け橋になったものとする。また、これらの実践から、授業の手法を変えることでお互いの信頼を築き、学習意欲や学習習慣についても変化を示す可能性があることを学んだ。

## 8 おわりに

今回の対象者は 11 名と少数であることから、確実なモデルケースとは言えないが、定期試験の結果を踏まえた評価では、おおよそのアウトラインは見えたと考える。学校生活で大切な項目の中に、欠席、遅刻、早退がある。また、授業中の居眠りや実習に対する消

極的な態度は、最終結果としての定期試験にも直接影響を及ぼすことになる。他国に比べて日本の場合、学校外における勉強時間はかなり低いとされている。予習、復習が殆ど行われていない結果、音読が苦手などという基本的な行動さえも覚束無い状態がはっきり見えるような事例もあった。

授業といえば座学から進めるのが一般的であるが、フリーカードの内容を精査した結果、シラバスの一部について変更を加え、本物を先に見せる、触らせるといった、いわゆる、「百聞は一見に如かず」に従っての授業を行った。その後の授業態度や確認テストの結果から、座学における理解度は向上したと考える。

授業が面白い、欠席がない、受講態度が良い学生の成績が向上するのは当たり前である。しかし、あまりにも全てを詳細に指導することは、反面、学生の考える力を低下させることにはならないだろうか。事細かに指導するのではなく、ある程度学生に考えさせる空白を作る指導も重要なことではないかと考える。欠席や遅刻をしない、予習や復習といった凡事徹底こそが学力向上の常道ではないだろうか。

指導者である教員と受講者である学生間の確かな相互関係を確実に継続し、より効果的な知識と技術の習得を行い、緊密なコミュニケーションの醸成を図りながら、さらなる学力の向上に向けてお互いに切磋琢磨することが重要だ。今後も学生の不安などを解消できるような授業展開となるような工夫を心掛けるべしと考える。授業の度に同じ言葉を何度も煩く話をしたが、「忠言耳に逆らう。」そんな言葉の意味を静かに気付いてくれたら幸いである。今後の目標として、指導者と学生が和衷協同をもって、全員が一丸となり、救急救命士国家試験 100%合格に繋がるための学校生活を創造していきたい。

指導者の指導力が向上する、学生の学力が向上するための確立されたアルゴリズムは存在するのだろうか。自問はしても、自答が出来ない瞑想の日々である。

最後に 30 回のフリーカード作成に協力して頂いた救急救命士学科第 15 期生の学生諸君に感謝する。

受理日：2021 年 2 月 17 日